

嵯峨の野宮神社を舞台として展開する御息所の話

私は、源氏物語の中で、御息所の話が思想的にも大変重要な位置を占めていると思う。それは源氏物語全体を読まないで理解できないことであるが、源氏物語全体を読みこなすなんてことはなかなかできないことなので、その要点を知るために次のホームページを紹介しておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/genjiyouten.pdf>

それでは、御息所の話について説明しよう。

御息所は大臣の娘に生まれる。東宮妃となり、一女をもうけるも、東宮と死別。東宮の死後、年下の光源氏と恋愛関係に陥る。矜持の高い彼女をやがて持てあますようになり、逢瀬も間遠になる。源氏にのめりこんでいく御息所は、彼を独占したいと渴望しながらも、年上だという引け目や身分高い貴婦人であるという誇りから素直な態度を男に見せることができず、自分を傷つけまいと本心を押し殺す。

この自己抑圧が、以降物語の中で御息所を生霊、死霊として活躍させる。押し殺した妬心が、抑制の失われる度に身からさまよい出でて、源氏の愛する女君たちに仇を成すようになるのである。

葵巻では、賀茂祭（葵祭）の加茂川での斎院御禊見物の折に、悪阻中の葵の上の牛車と鉢合わせし、場所争いで葵の上方の下人に恥辱的な仕打ちを受けた。これが発端で御息所は**生霊**となって妊娠中の葵の上を悩ませるが、それを源氏に目撃される。御息所が、己の髪や衣服から芥子（悪霊を退けるための加持に用いる香）の匂いがするのを知って、さては我が身が生霊となって葵の上に仇をなしたか、と悟りおののく場面は物語前半のクライマックスのひとつである。

その後葵の上は夕霧を無事出産するも急死、源氏の愛を完全に失ったと察した御息所は、彼との関係を断ち切るため斎宮になった娘に付き添い野宮に入る。9月7日に野宮を訪ねてきた源氏と最後の別れを惜しんだ後、斎宮と共に30歳で伊勢に下った（「賢木」）。6年後、帝が変わり斎宮の任期が終わると京に戻り出家、見舞いに訪れた源氏に娘に手をつけぬよう釘を刺しつつ、将来を託して病没。源氏は斎宮に興味を持ちつつも御息所の遺言を守り、斎宮を養女として冷泉帝に入内させ後見した（「漣標」）。

源氏物語は架空の小説では、当時、[齋王](#)となった姫が1～3年間潔斎をして身を清める野宮が現在の[野宮神社](#)にあった。野宮は、天皇の即位毎に定められていたために、野宮跡とされる神社が京都には野々宮神社や[齋宮神社](#)などが幾つかあった。御息所が齋王になった娘としばらく過ごしているところに、光源氏が御息所に会いにやってくるのである。二人は逢瀬を楽しみつつも、それが最後の別れとなる。